

第三章 薫の物語 八の宮の娘たちを垣間見る

[第一段 晩秋に薫、宇治へ赴く]

秋の末つ方(薫君二十二歳の晩秋に)、四季にあててしたまふ御念仏を(八宮は四季毎になさる御念仏行を)、この川面は(このかはづらは、宇治川に面したこの宮邸では)、網代の波も(網代に当たる波の音も)、このころはいとど耳かしかましく静かならぬを(秋の長雨で水かさが増して、此の頃はますます激しく静かならず気が散る)、とて(ということ)、かの阿闍梨の住む寺の堂に移ろひたまひて、七日のほど行ひたまふ(かの阿闍梨の住む寺の堂にお移りになって、七日間勤めなさいます)。「秋の末つ方」は注に<薫二十二歳の晩秋。>とある。晩秋、と言えば九月の半ば過ぎだろうか。ところで、薫22歳、という想定は可能性の一つに過ぎないが、本文に明示された他所での記事と破綻なく説明できる可能性の内の、最年少の想定だ。そして、この最年少の想定に立つ事が、今のところ最も無難ではある。上文に「三年ばかりになりぬ」とあるので、そうであって欲しいという祈りを込めて、此処で思い切って<薫二十二歳の晩秋。>を明示して置く。

姫君たちは、いと心細く、つれづれまさりて眺めたまひけるころ(姫君たちは大変心細くますます遣る瀬無く庭を眺めて暮らしていらっしゃる頃)、中将の君、久しく参らぬかなと、思ひ出できこえたまひけるまに(中将の薫君が久しく宇治の八宮邸に参上していなかったと思ひ出し申しなさって)、*有明の月の、まだ夜深くさし出づるほどに出で立ちて(有明の月がまだ夜更けに差し出た時分に出立して)、いと忍びて(本当に目立たないように)、御供に人などもなくて(供人も少なく)、やつれておはしけり(質素な身なりで出かけなさいます)。*「ありあけのつき」は陰暦の二十日前後に明け方まで残る月。多くは二十日過ぎのことらしく、ざっと九月二十日頃の、恐らく二十一日の朝だったのだろう。

川のこなたなれば(宮邸は宇治川の北側だったので)、舟などもわづらはで(舟などは不要で)、御馬にてなりけり(馬での御訪問でした)。入りもてゆくまに(山に差し掛かり)、霧りふたがりて、道も見えぬ繁木の中を分けたまふに(霧深く道も見えない茂木の中を分け入りなさると)、いと荒ましき風のきほひに(とても荒々しく吹き競う風に)、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかるも、いと冷やかに(ほろほろと落ち乱れる木の葉の露が散り掛かるのもとても冷たく)、*人やりならずいたく濡れたまひぬ(自分で進み出た南路ながら、思いの外にひどく濡れてしまいました)。*「人やりならず」は注に<誰のせいでもなく、自分から求めて出掛けた夜道のために、というニュアンス。>とある。が、「ニュアンス」というより、「人遣りならず」の語意は<誰のせいでもなく、自分から求めて>ということだ。が、注の意図は多分、このワザとらしい言い方で、「いたく濡れたまひぬ」が物理的に<びしょ濡れになった>ということよりも、予想以上に深かった時雨の山道の露けさに中将が異次元を感じたかの<ニュアンスがある文>だ、という事を指摘しているのだろう。それなら同感で、「濡る」が持つ情絡みの色事の響きは、読者に危うい展開を期待させようという作者のあざとさ、ではありそうだ。

かかるありきなども(このような山道歩きなども)、をさをさならひたまはぬ心地に(滅多になさらない珍しい経験の感想から)、心細くをかしく思されけり(中将は心細く印象深く思われなさいました)。

「山おろしに耐へぬ木の葉の露よりも、あやなくもろきわが涙かな」(和歌 45-07)

「木の葉のしずくが散る前に、不意にこぼれたわが涙」(意識 45-07)

*「このはのつゆ」は中将にとって意外に深かった。宇治山の厳しさを改めて思い知らされた中将は、その山暮らしに耐えている八宮の聖人ぶりの<そのほんの一端の苦勞=このはのつゆ>にも及ばない我が身の未熟さを嘆いた、のだろうか。「耐へぬ、よりも、もろき」というメリハリの無さは、むしろ二段オチの冗句っぽく聞こえるし、そのままの情けなさの方が情緒はあるような気もするが、「やまおろし」には厳しい響きがあるのかも。

山賤のおどろくもうるさしとて(村人が起きて来るのも面倒だと)、隨身の音もせさせたまはず(隨身護衛官の人払いの声も上げさせなさいません)。柴の籬を分けて(民家の柴垣沿いの道を通り過ぎて)、そこはかとなき水の流れどもを踏みしだく駒の足音も(小川を渡る駒音)、なほ(一切)、忍びてと用意したまへるに(立てないように気をつけて進みなさるが)、隠れなき御匂ひぞ(隠しようも無い薫中将君の芳香が)、風に従ひて(風に運ばれて)、主知らぬ香とおどろく寝覚めの家々ありける(誰が来たかと驚いて目を覚ます家々がありました)。

近くなるほどに(宮の山荘に近づくに連れて)、その琴とも聞き分かれぬ物の音ども(何の弦楽器かとも聞き分けられない音色が)、いと*すごげに聞こゆ(ひどく寂しげに聞こえます)。「常にかく遊びたまふと聞くを(八宮はいつもこのように演奏していらっしゃると聞いていたが)、ついでなくて、宮の御琴の音の名高きも、え聞かぬぞかし(機会が無くてその評判高い御琴の音も聞いた事がなかった)。よき折なるべし(是は良い機会だ)」と思ひつつ入りたまへば(と思いながら中将君は邸内にお入りになると)、琵琶の声の響きなりけり(その御琴は琵琶の音色なのでした)。

「*黄鐘調」に調べて、世の常の掻き合はせなれど(黄鐘調に調弦した普通に掻き合わせた演奏だが)、所からにや、耳馴れぬ心地して(宇治山という場所の所為か聞き慣れない情緒で)、掻き返す撥の音も、ものきよげにおもしろし(掻き上げる撥の音も清々とした響きがある)。箏の琴、あはれになまめいたる声して、たえだえ聞こゆ(旋律を取る十三弦の箏の琴はしみじみと優美な音で途切れ途切りに聞こえます)。*「凄気」は<気味悪げ。ひどく寂しくて恐ろしげな様子。>と古語辞典にある。*「黄鐘調(わうしきでう)」は<雅楽の六調子の一。黄鐘の音を主音とする旋法。>とあり、「黄鐘(おうしき)」は<日本音楽の十二律の一。基音の壹越(いちこつ)より七律高い音で、中国の十二律の林鐘(りんしょう)、洋楽のイ音にあたる。>と大辞泉にある。「掻き合はせ」とあるのでダウン・ストロークでのコード弾きなのだろう。

[第二段 宿直人、薫を招き入れる]

しばし聞かまほしきに、忍びたまへど(中将君は暫く聞いていたので隠れていらっしゃったが)、御けはひしるく聞きつけて(御香りで来訪がはっきりと知れて)、宿直人めく男、*なまかたくなしき、出で来たり(門番らしい男のいくらか無骨な者が出てきました)。*「なま」は<いくらか、ことなく>くらいの接頭語。「かたくなし(頑し)」は<偏屈だ、見苦しい、気が利かない>などと古語辞典にある。

「*しかしかなむ籠もりおはします(宮はこういう次第で阿闍梨の堂に籠もっておいでです)。御消息をこそ聞こえさせめ(御来訪を宮に御連絡申し上げましょう)」と申す(と申します)。*「しかしかなむ」は省筆で実際は一章にあった、季節ごとの念仏行がこの宇治川近くでは集中して上げられない、という理由を宿直人は中将に説明したのだろう。

「何か(いや、それには及ばない)。しか*限りある御行ひのほどを、紛らはしきこえさせむにあいなし(そのような定例の念仏行をお邪魔申すほどの用は無い)。かく濡れ濡れ参りて、いたづらに帰らむ愁へを(ただ、このように山露に濡れて御訪問して無駄足で帰る切なさを)、姫君の御方に聞こえて、あはれとのたまはせばなむ、慰むべき(姫君にお知らせ申して御同情頂けたら救われます)」 *「限りある」は<期限がある>のではなく、様式が<限定されている→定型の、定例の>という言い方なのだろう。

とのたまへば(と中将が仰ると)、醜き顔うち笑みて(宿直人は醜い顔に笑みを見せて)、

「申させはべらむ(左様に姫様には、お伝え申し上げ致します)」とて立つを(と行って行き掛けるのを)、

「しばしや(ちょっと待て)」と召し寄せて(と中将は呼び止めなさって)、

「年ごろ、人伝てにのみ聞きて(年来、話にだけ聞いていて)、ゆかしく思ふ御琴の音どもを(聞きたかった姫君たちの御琴の音を聞ける)、うれしき折かな(嬉しい機会であることだ)。しばし、すこしたち隠れて聞くべきものの隈ありや(しばらく、このまま少しこのあたりで隠れて立ち聞きできるような物陰はないか)。つきなくさし過ぎて参り寄らむほど(不用意に行き成りご挨拶申し上げて)、皆琴やめたまひては、いと本意なからむ(すっかり琴をお止めなされたのでは、全く不本意だ)」とのたまふ(と仰います)。

御けはひ、顔容貌の(その中将の立姿や顔立ちが)、さるなほなほしき心地にも(このようなごく平凡な男にも)、いとめでたくかたじけなくおぼゆれば(大変優れて尊く思えたので)、

「人聞かぬ時は、明け暮れかくなむ遊ばせど(姫君たちは誰も聞いていない時は日頃からこのように演奏なさいますが)、下人にてても、都の方より参り(身分の無い者であっても都から参った者が)、立ちまじる人はべる時は、音もせさせたまはず(その中に居る時にはお弾きになりません)。おほかた(第一、宮様は)、かくて女たちおはしますことをば隠させたまひ(このように姫君たちがいらっしゃる事自体をお隠しになって)、なべての人に知らせたてまつらじと、思しのたまはするなり(誰にもお知らせ申すまいとの御考えを仰っていらっしゃいます)」

と申せば(と宿直人が申せば)、うち笑ひて(中将は打ち笑って)、

「あぢきなき御もの隠しなり(無駄なお隠し立てだ)。しか忍びたまふなれど(そのように目立たないようにも)、皆人(世間の者は皆)、ありがたき世の例に(珍しい話として)、聞き出づべかめるを(聞き知っているようだということに)」とのたまひて(と仰って)、

「なほ、しるべせよ(是非、物陰に案内してくれ)。われは、好き好きしき心など、なき人ぞ(私は姫目当ての好色漢ではないのだから)。かくておはしますらむ御ありさまの(こうして此処に暮らしていらっしゃる姫君たちの御様子が)、あやしく(珍しく)、げに、なべてにおぼえたまはぬなり(本当に普通とはお見えにならないからなのだ)」

とこまやかにのたまへば(とくどくどしく仰るので)、

「あな、かしこ(是は危ない)。心なきやうに(役立たずの門番と)、後の聞こえやはべらむ(後で言われそうですね)」

とて(と言って)、あなたの御前は(姫君たちの御部屋の前庭は)、竹の透垣しこめて(竹の透き垣が植え込んであって)、皆隔てことなるを(此処とは別の仕切りになっていることを)、教へ寄せたてまつれり(教えて近くにお連れ申し上げたのです)。御供の人は、西の廊に呼び据ゑて(中将の供人は西廊下にある侍所に案内して)、この宿直人あひしらふ(この宿直人が応接します)。

[第三段 薫、姉妹を垣間見る]

あなたに通ふべかめる透垣の戸を(御前の庭に通じているらしい垣根の仕切り戸を)、すこし押し開けて見たまへば(中将が少し開けて中の様子を御覧になると)、月をかしきほどに霧りわたれるを眺めて(月に風情良く霧が掛かった庭を眺めて)、簾を短く巻き上げて、人びとみたり(簾を高く巻き上げて誰かが居ました)。簀子に、いと寒げに、身細く萎えはめる童女一人、同じさまなる大人などみたり(簀子の縁側にはとても寒そうに痩せて古着の童女が一人と同じように痩せた古着の女房などが居ました)。内なる人一人、柱に少しみ隠れて、琵琶を前に置いて、撥を手まさぐりにしつつみたるに(内の廂にいる人の一人は柱に少し隠れ座して琵琶を前に置いて撥で弾き真似をしていると)、雲隠れたりつる月の、にはかにいと明るさし出でたれば(雲に隠れていた月が不意にととても明るく差し出たので)、

「*扇ならで、これしても(扇じゃなくてもこの撥で)、月は招きつべかりけり(お月さんをお招き出来るみたいね)」 *「あふぎならで」の言い回しについては、注に<中君の詞。扇で月を招くという故事について、『異本紫明抄』は「月重山に隠れぬれば、扇をあげて之を喩ふ」(和漢朗詠集、仏事)を指摘。>とある。「扇で月を招く」というよりは<扇を月に見立て>て陽気に騒ぐ、みたいに聞こえる。

とて、さしのぞきたる顔(と言って空をのぞき見る顔は)、いみじくらうたげに匂ひやかなるべし(とても素直に楽しんでいるようでした)。

添ひ臥したる人は(横に寝そべっているもう一人は)、琴の上に傾きかかりて(十三弦琴の上に身を乗り出すようにして)、

「*入る日を返す撥こそありけれ(舞楽に沈む夕日と呼び戻す撥はあっても)、さま異にも思ひ及びたまふ御心かな(月を呼ぶ撥とは、変わったことを思い付きなさいますね)」 *「入る日を返す撥こそありけれ」は注に<以下「御心かな」まで、大君の詞。『集成』は「夕日と呼び返す撥のことは聞いていますが、(月とは)変った思いつきをなさるのね」と訳す。『源氏積』は「還城楽陵王を危ぶめむとするに、日の暮るれば、撥して日を手搔きたまふに、引き返されたる也」と注す。舞楽「陵王」の所作を踏まえた発言。>とある。

とて、うち笑ひたるけはひ(と言って笑っているような様子で)、今少し重りかによしづきたり(琵琶の人よりは少し年長で教養深そうでした)。

「及ばずとも(入日ほどの縁は無くても)、*これも月に離るるものかは(琵琶に隠月は付物だから、撥も月に無縁じゃないでしょ)」 *「これも月に離るるものかは」は注に<「これ」は撥をさす。琵琶の撥を収める所を隠月というので無関係ではない、と言ったもの。>とある。「隠月(いんげつ)」は<琵琶(びわ)の胴の表面下部、覆手(ふくじゅ)の下に隠れている楕円形の穴。上部の半月形の穴に対し、満月ともいう。>と大辞泉にある。

など、はかなきことを、うち解けのたまひ交はしたるけはひども(などと他愛無い事を打ち解けて言い交わしなさっている姫君たちの様子は)、*さらによそに思ひやりしには似ず(無風流だろうと全く違うように想像していたのに反して)、いとあはれになつかしうをかし(実際の姫君たちは、とても情緒があって親しみが持てました)。 *「さらによそに思ひやりし」は二章四段に「世の常の女しくなよびたる方は遠くや」と、宮の厳しい修行生活から推して姫君たちも世に背を向けた<実直生活ぶり>を中将は想像していた。

「昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに(昔話として語り継がれる若い女房などが読む物語を耳にするにも)、かならずかやうのことを言ひたる(必ずこうした雛にも稀な佳人という設定を言っているが)、さしもあらざりけむ(実際にはそんなことは無いだろう)」と、憎く押し量らるるを(と中将はつまらない作り話に思っていたが)、「げに、あはれなるものの隈ありぬべき世なりけり(実に哀れな事が目に見えないところに有り得る世の中なのだ)」と、心移りぬべし(と思い直したようです)。

霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず(霧が深くてはつきりとは見えないので)、また、月さし出でなむと思すほどに(また月が差し出て来ないかと中将がお思いになっている時に)、奥の方より、「人おはす」と告げきこゆる人やあらむ(部屋の奥から「客人がいらっしゃいました」と知らせる声でもあったらしく)、簾下ろして皆入りぬ(簾を下ろして皆は室内に入りました)。

おどろき顔にはあらず(驚き慌てた様子も無く)、なごやかにもてなして、やをら隠れぬるけはひども(和やかな物腰で静かに引き籠もって行った人びとの様子が)、衣の音もせず、いとなよよかに心苦しくて(衣擦れの音もせず、とても柔らかに労しく)、いみじうあてにみやびかなるを(非常に上品で優雅なのを)、あはれと思ひたまふ(中将は印象深くお思いなさいます)。

やをら出でて(中将は静かにその場を離れて、侍所に戻り)、京に、*御車率て参るべく(都の自邸に牛車で迎えに来るようにと)、人走らせつ(使いを走らせました)。 *「おおんくるまゐてまゐるべく」は注に<主語は薫。帰りための牛車を迎えにやった。行きは微行のため馬で来た。>とある。明らかに姫君たちを意識して、自分の地位顕示を意図したもの、ではありそうだが、其処まで言うのは気が引ける。八宮に仏道修行を師事すべく質素な身なりで来た、という初心からすれば、質素なままで帰ってこそ、八宮に中将の姿勢は伝わりそうだが、中将の興味はあっさり姫君たちに移ってしまったらしい。ただ、それを宮が蔑むのか、期待するのかは、現にこうして姫たちを風流に育てているのだから、微妙な点はあるにしても、基本的には後者なのだろう。

ありつる侍に(先ほどの宿直人には)、

「折悪しく参りはべりにけれど(宮がお留守とは折悪しく参上したようですが)、なかなかうれしく(姫君たちの御琴が聞けて、却って嬉しく)、思ふことすこし慰めてなむ(あなたのご配慮で

気分も少し慰められました)。かくさぶらふよし聞こえよ(奥へ私の来訪を伝えて下さい)。いたう濡れにたるかことも聞こえさせむかし(姫君には私が山道で、ひどく濡れてしまった愚痴も聞いて頂きたい)」

とのたまへば(と中将が仰ると)、参りて聞こゆ(侍は奥へ伝えに参ります)。

[第四段 薫、大君と御簾を隔てて対面]

かく見えやしぬらむとは思しも寄らで(姫君は自分たちがこのように中将に見られてしまったとは思ひも付きなさらず)、うちとけたりつることどもを、聞きやしたまひつらむと(気楽に弾いていた琴の音くらいは聞かれてしまったかも知れないと)、いといみじく恥づかし(本当にととても恥じ入ります)。

あやしく、香うばしく匂ふ風の吹きつるを、思ひかけぬほどなれば(不思議なほどに芳しく匂う風が吹いて来たので、意外な中将の来訪に気づいて)、「驚かざりける心おそさよ(気付かなかった迂闊さよ)」と、心も惑ひて(と動揺して)、恥ぢおはさうず(姫君たちは恥づかしがりあっていらっしやいます)。

御消息など伝ふる人も(取次役の侍も)、いとうひうひしき人なめるを(とても不慣れで気が利かなそうだったので)、「折からにこそ(付け入る隙が有りそうだと)、よろづのことも(何事も臨機応変に)」と(と中将は自分で判断して)、まだ霧の紛れなれば(まだ霧が深かったので)、ありつる御簾の前に歩み出でて、ついゐたまふ(さきほど見た御簾の前の縁側まで進み行って、さっさと腰を下ろしなさいます)。

山里びたる若人どもは、さしいらへむ言の葉もおぼえで、御茵さし出づるさまも、たどたどしげなり(田舎暮らしの若女房たちは対応の言葉も分からずに御座布団を差し出すのもたどたどしいのでした)。

「この御簾の前には(縁側で部屋の外のままでは)、はしたなくはべりけり(情けなく存じます)。うちつけに浅き心ばかりにては(此方は、ちょっとした気まぐれの軽い気持では)、かくも尋ね参るまじき山のかけ路に思うたまふるを(こうしてお訪ね申せない山の難路と存じますが)、さま異にこそ(変わったお持て成しです)。*かく露けき度を重ねては(このように度々の参上を申し上げれば)、さりとも、御覧じ知るらむとなむ(さすがに私の気持ちをお分かり頂けると)、*頼もしうはべる(楽しみにしております)」 *「かく露けき度を重ねては」は注に<『集成』は「こうして、露に濡れ濡れ何度も参りましたなら。「度」に「旅」を響かす」と注す。>とある。度重なる、と言え、心寄せ仕うまつりたまふこと三年ばかりになりぬ(二章四段)とあって、自らの訪問も本当に度重なっていただろうに、今さらに姫君を意識する、というのは何とも作者の話の都合を感じるが、かといって他に如何仕様もなく、また実際に、ひよんなことから話が進むということは間々あることではある。 *「たのもし」は<頼りに思う>だが、実際に援助を頼る、という意味の他に、漠然と<好結果を期待する→恋仲になれると思う>という言い方もあるらしい。とは言っても、中将は今までの今まで然して姫君に期待していなかったのに、またそれだけにかも知れないが、姿を見た途端に、前々から貴方目当てだったと言ひ退けるのは、厚かましさと云うよりは身に付いた応接態度なのだろう。

と(と中将は)、いとまめやかにのたまふ(実に誠意ありげに仰います)。

若き人びとの、なだらかにもの聞こゆべきもなく(若い女房たちがすらすらと応答申すことも出来ず)、*消え返り*かかやかしげなるも(呆然として恥ずかしがっているのも)、*かたはらいたければ(きまりが悪く不都合なので)、*女ばらの奥深きを起こし出づるほど(古女房たちの奥で寝入っている者を呼び起こしてくるのが)、久しくなりて(手間取って)、わざとめいたるも苦しうて(不用意である事を曝すようなのも見苦しいと)、 *「消え返る」はく消えて無くなる。正体を失う。>と古語辞典にある。 *「かかやかし」は「輝かし」でく照れくさい>と古語辞典にある。 *「かたはらいたければ」は注にく主体は姫君。>とある。が、この注も分かり難い。主語は「起こし出づるほど」までが「若き人びと」であるようにも見える。「かたはらいたし」という語自体も主観にも客観にも使えるし、意味も原義はく傍目に悪い>という不都合状態で、その場面に応じてくきまりが悪い。恥ずかしい。気が引ける。笑止だ。>などという言い方になるので始末が悪い。 *「をんなばら」の「ばら」は複数を示す接尾語とのことで、「女ばら」というだけではく女たち>でしかないが、主語が「若き人びと」であれば、別のく女たち=古女房たち>を意味する、ようだ。

「何ごとも思ひ知らぬありさまにて(どういとお話か存じませぬので)、知り顔にも(分かったような顔で)、いかばかりかは、聞こゆべく(とてもお答え申せませぬ)」

と、いとよしあり(ととても優雅で)、あてなる声して(上品な声で)、ひき入りながらほのかにのたまふ(引き下がりながら小さく仰る、人がいます)。

「*かつ知りながら(当方は話の向きが恋路であると承知しながらも)、憂きを知らず顔なるも(何の話か分からないという貴方の連れ無い御返事にも、厭な顔をお見せ申さないのが)、世のさがと思うたまへ知るを(常識を弁えた対応とは存じておりますが)、*一所しも(せめて情緒をご存知らしい貴方だけには)、あまりおぼめかせたまふらむこそ(あまりお惚けになるのは)、口惜しかるべけれ(残念です)。 *「かつ知りながら」は注にく以下「思ふさまにはべらむ」まで、薫の詞。「かつ」は大君の「何ごとも思ひ知らぬ」云々というのを受けていう。>とある。「かつ」は、既述された事柄に相對したくもう一方に於いては>という言い方を示す前置副詞なので、姫君に対してくもう一方の自分は>と言っていることになる。ということは、姫君が「何ごとも思ひ知らぬ」といった事に対して、中将はく「かつ知りながら」=一方の自分は何ごとかを知っていながらも>相手が「何ごとも思ひ知らぬ」と言う連れ無さに対して、それをく「憂きを知らず顔なるも」=辛いとは気付かない顔をして見せるのも>く「世のさがと思うたまへ知る」=世の常と弁える>と言っているのだから、「何ごと」がく恋の道>である事が姫と中将の両者に共通認識されていなければ成立しない会話文なのであって、言い換え文ではそれを客観明示しないと、どうにも落ち着かず収まりが悪い。これは非常にまどろっこしい言い回しに見えるが、この場での両者の共通認識を前提にすれば、実は二人にだけは真意が通じ合う気の利いた言い回しなのかもしれない。言い慣れているから、まどろっこしい理屈がすらすら言えるとか。 *「一所しも」は注にく『集成』は「ほかならぬあなたが」と訳す。>とある。確かに、「しも」は条件の強調を示す副助詞らしく、「一所しも」はくせめてそのお一人だけには>という言い方であり、そのくその>とは「いとよしあり、あてなる声してひき入り」なざる貴方、という文脈だ。それに、「いとよしあり」は中将が内心で思った個人的な印象に過ぎない、と字面の形式上では読めるが、「よしあり」は一定の教養水準を前提にした判定であり、その水準基準は姫自身も認識している客観値であり、つまりは姫自身もその教養を自負していることになる。勿論、その基準値に対する個々人の思惑や印象は違うワケだが、非明文であろうと有資格者と認められる、のだろう。

ありがたう(貴重な)、よろづを思ひ澄ましたる御住まひなどに(全てを悟り澄ました宮様のご生活に)、たぐひきこえさせたまふ御心のうちは(寄り添い申しなさっているあなたの御分別で)、何ごとも涼しく推し量られはべれば(何ごとも聡明にご推量いただければ)、なほ(やはり)、かく忍びあまりはべる深さ浅さのほども(このように抑え切れずにいる気持ちの真偽も)、分かされたまはむこそ、かひははべらめ(お分かり頂くのが望ましく、思われます)。

世の常の好き好きしき筋には(通り一遍の浮ついた興味と)、思しめし放つべくや(お思いになってお見捨て下さいますな)。さやうの方は、わざと勧むる人はべりとも、なびくべうもあらぬ*心強さになむ(左様なことは誰かが御膳立てをしてもお招きに与らない身の堅さです)。*「こころづよさ」は<気の強さ。意志の固さ。>でもあるが<情に流され難いさま=身の堅さ>でもあるらしい。ただ、本当の堅物はこういうことを言わないものではあるのだろうが。

おのづから聞こしめし合はするやうもはべりなむ(自然と思い当たりなさることも有るかと思存しますが、)。つれづれとのみ過ぐしはべる世の物語も(ただ遣る瀬無く過ごしている私の人生での四方山話も)、聞こえさせ所に頼みきこえさせ(聞いて頂きたく思い申し上げ)、またかく、世離れて、*眺めさせたまふらむ御心の紛らはしには(またこのように世離れて静観していらっしゃるあなたの気晴らしになるものとしては)、さしも、驚かせたまふばかり(何かお気づきの点をお教え頂くようにして)聞こえ馴れはべらば(親しくさせて頂けましたら)、いかに思ふさまにはべらむ(どんなにか嬉しいことでしょう)」 *「ながむ」は<物思いに耽る。淡々と暮らす。>という語用が多いようだが、ここでも基本的には左様な意味もあるかと思うが、「さしも(それほどにも)」の「さ」が「驚かせたまふばかり」の<何かの発見>だとするなら、この「ながむ」は<全体を静観して熟考する→真理を悟る>と読まないという意味が通らないように見える。宮への尊敬と姫への興味が無い交ぜになっている中将の心境のようだが、意外と素直な本音なのかも知れない。いくら知らないほど興味が増すと言っても、即物的な印象だけでは肉欲だけだ。いや、むしろその肉欲こそが価値あるもので、後はその肉欲を何処までおいしく調理するかという演出に過ぎない、という言い方も十分成立し得る見方かとも思うが、何れにしても、有機物反応を超えるものでは無さそうな話だ。

など、多くのたまへば(などと中将が言葉多くしてお話しなさると)、つつましく、いらへにくくて(姫は慎ましく答えようもなく)、起こしつる老い人の出で来たるにぞ(起こした年配の女房が出て来たので)、譲りたまふ(応対をお任せなさいます)。

[第五段 老女房の弁が応対]

*たとしへなくさし過ぐして(その老女は意外にも妙に落ち着き払って)、 *「たとしへなし」は<譬えるものが無いほど、他に類を見ないほど>という言い方だが、此处での語用は本当に他に例をみないのか如何かではなく、その意外さに比較するものが思い付かない、という驚き呆然としている状態で、そういう状態にさせるほど<程度が甚だしかった>と言っているのだろう。「さし過ぐす」は<出過ぎる>だが、此处では応対役として呼び出されたのだから<出張る>事自体は当然でもあり、それにしても<馴れ馴れしい、態度が大きい、大物ぶっている>みたいなことなのだろう。

「あな、かたじけなや(まあ勿体無くも)。かたはらいたき御座のさまにもはべるかな(中将殿を簀子に奉るとは、大変失礼なご案内を申しました)。御簾の内にこそ(御簾内へどうぞ)。若き

人びとは、物のほど知らぬやうにはべるこそ(若い人たちはものを知らないようで、無作法致しました)」

など、*したたかに言ふ声の*さだすぎたるも(などと物慣れて言う声がしわがれているのも)、かたはらいたく君たちは思す(如何にも一線の女中に欠いているようで、きまり悪く姫君たちはお思いになります)。 *「したたか」は<しっかりしている、強い、太い>といった形容動詞だが、「したたかに」は<したたかなさまで→物慣れて>という副詞語用なのだろう。 *「さだすぐ」は<盛りが過ぎる→年老いる>で、「かたはらいたく思す」ことの説明になっているようだが、「さだすぎたる」を<年老いている>と言ってしまうと「声」自体の状態を言い表せないで、その<盛りが過ぎた>という意味は「かたはらいたし」の方に補語して、「声」の方には幾分と当て推量ながら<しわがれている>として置く。

「いともあやしく(宮様が、とても風変わりな)、世の中に住まひたまふ人の数にもあらぬ御ありさまにて(都暮らしをなさる方の資格者とも思えないお暮らしぶりで)、さもありぬべき人びとだに(疎遠で良い筈もない縁者の人たちでさえ)、訪らひ数まへきこえたまふも(訪ねてお付き合い下さることも)、見え聞こえずのみなりまさりはべるめるに(お見掛け申し上げないばかりに成って来ておりますところに)、

ありがたき御心ざしのほどは(中将殿の御奇妙な御気遣いのほどは)、数にもはべらぬ心にも(物の数ではない私のような者にも)、*あさましきまで思ひたまへはべるを(意外で有難く存じられますので)、若き御心地にも思し知りながら(姫君たちもあなた様のご厚情はよくお分かりでいらっしゃりながらも)、聞こえさせたまひにくきにやはべらむ(ご挨拶の申しなさりように慣れていらっしゃらないようです)」 *「あさまし」は<卑しい。情けない。中身が無い。>という低評価を示す言い方でもあるが、此处では<意外だ。驚きだ。>という状態説明の言い方らしい。現代語の「あさましい」にも<意外だ>という語用はあるが、その場合でも悪い意味で使われるので、此处にある「あさまし」の<意外な厚情に驚かされる=有難い>という語用とは違う語感だ。しかも、この善悪に関わらず<意外だ>という状態説明の方が「あさまし」の原義だと古語辞典には説明されている。確かに、「情けない」と「驚きだ」とに共通部分はあって、現代語の「浅ましい」にも<驚くほど情けない>という語意はあるが、それでもやはり<驚くほど有難い>というようには語用しない。で、語形考察上は「あさまし」は動詞「浅む(あさむ)」の形容詞化したものとされているようだが、「あさむ」には二系統の語が混同している、と個人的に考えてみた。即ち、そのひとつは、「覚む(さむ、思い冷ます=悟る)」に接頭語の「あ」が付いた<「あさむ」=ふと気付く→驚く>。もうひとつは、「浅す(あす、浅くなる)」を客体視した<「あさむ」=浅くなる傾向が強まる→侮る>。ただ、「意外性」は疑念とまでは言わないにしても疑心を含むものなので、「あさまし」は謝意の表明にはなっていない、相手の機嫌を損なわないギリギリの皮肉が込められた言い方ではあるのかも知れない。この老女は姫に対しては「思し知りながら」とあるが、後輩女房を「物のほど知らぬやうにはべるこそ」と言っていたのであり、文脈上は姫が中将に自分たちを「何ごとも思ひ知らぬありさまにて」(四段)と言い、中将が「かつ知りながら」(同)と応えたところから引き続いている場面なので、「もののほど」の中身を明示しないままで話が続く奇妙さ、滑稽さを作者も読者も意識する文、なのだろう。

と(と老女が)、いとつつみなく*もの馴れたるも(全く物怖じせずに訳知り顔なもの)、なま憎きものから(何となく不遜に思われるものながら)、けはひいたう人めきて(態度がとても貫禄があつて)、よしある声なれば(品のある声遣いなので)、 *「もの馴る」は<物慣れている、世慣れている>だが、世慣れた態度は最初から述べられているので、此处では主人である宮の暮らしぶりにまで言及する<事情

通であること←縁者ぶり>を言っているものと読んで置く。逆に、縁者ぶりが窺えるので、並の女房ならく不届きだ=憎し>となるところが、「なま憎し」という中途半端さの印象なのだろう。

「いとたづきも知らぬ心地しつるに(大変頼りない気持でいましたところに)、うれしき御けはひにこそ(嬉しい方がいらっしゃいました)。何ごとも、げに(何でも実にそのように)、思ひ知りたまひける頼み(ご存知でいらっしゃる頼もしさは)、こよなかりけり(この上ないものです)」

とて、寄り居たまへるを(と言って部屋の端に寄って座っていらっしゃる中将の御姿を)、几帳の側より*見れば(老女が几帳の横から覗き見れば)、*曙、やうやう物の色分かるるに(夜の白みがかった時分で次第に物の形が見えてくると)、げに、やつしたまへると見ゆる狩衣姿の、いと濡れしめりたるほど(確かに質素な格好をしていらっしゃる中将の狩衣姿がたいそう濡れ湿っていて)、「*うたて(何と是は)、この世の外の匂ひにや(この世のものとも思えない匂いだこと)」と(と女房たちが思うほど)、あやしきまで薫り満ちたり(中将の香りが不思議なほど芳香を放っていました)。*「見れば」は敬語がないので老女が主語らしい。*「あけぼの」は日の出前の夜が白んでくる時間だが、この日を陰暦の七月二十二日の朝だとすれば、下弦の月が前夜0時近くに出て、この日のお昼頃に沈むワケで、真上に差し出るのが朝の6時頃とは正に有明の月だが、この日の日の出は5時半少し前なので、曙は5時くらい。その通りの時間割で読めば、この話は真夜中の出来事ということらしい。いくら物事の進行がゆっくりしていた平安期の話とは言え、この内容の遣り取りで一晩が明けたというのは、何て言うか、分かるような、分からないような話だ。*「うたて」は<ウワツ何だろう>という驚きらしい。此处では<非常に優れている>ということのようだ。注には<女房たちの薫の発散する香の感想。『集成』は「極楽浄土の芳香はかくやと思ふ気持」と注す。>とある。香りは部屋に満ちていただろうから、老女や若女房ばかりか姫君たちにも感じられた筈だが、一応主語は女房たちにして置く。ただ、姫の存在が大前提の場面ではあり、老女の後ろに隠れている姫君や若女房らが、中将の動向に神経をそばだてている、という妖しくも危うい、哀しく切ない、ということは愉しくイヤラシイ名場面であることは間違いない。

[第六段 老女房の弁の昔語り]

この古い人はうち泣きぬ(この老女は泣き出しました)。

「さし過ぎたる罪もやと(余計な差し出口に成るかど)、思うたまへ忍ぶれど(存じまして控えていましたが)、あはれなる昔の御物語の(感慨深い昔のあなた様についてのお話しを)、いかならむついでにうち出で聞こえさせ(どのような機会にかお話し申し上げて)、片端をも、ほのめかし知ろしめさせむと(その一部だけでも少しお知らせ申したいと)、年ごろ念誦のついでにも(年来の読経の際にも)、うち交ぜ思うたまへわたるしるしにや(そうした願いの成就をも善行修行に加えてお祈り申してきた甲斐があつてか)、うれしき折にはべるを(このようにお会いできる機会を得て、嬉しい時なので)、まだきにおぼほれはべる涙にくれて(まだお話しする前から溺れるほどの涙に暮れて)、えこそ聞こえさせずはべりけれ(とてもお話し申し上げる事が出来ません)」

と、うちわななくけしき(と体を震わせて泣く老女の様子は)、まことにいみじくもの悲しと思へり(まことに非常に物悲しい話のように思われます)。

おほかた、さだ過ぎたる人は、涙もろなるものとは見聞きたまへど(およそ老人は涙もろいとは見聞きしていらっしゃるが)、いとかうしも思へるも(それにしてもこれほどのこととはただならないと思えるのも)、あやしうなりたまひて(中将は怪訝にお思いになって)、

「ここに、かく参るをば、たび重なりぬるを(此処にこのように参上するのは度重なって来たが)、かくあはれ知りたまへる人もなくてこそ(今まではこのように事情をお知りの方もいなくて)、露けき道のほどに、独りのみそほちつれ(湿りがちな山道に自分ひとりだけが濡れていました)。うれしきついでなめるを(良い機会のようですので)、言な残いたまひそかし(残らず仰って下さい)」とのたまへば(と仰ると)、

「かかるついでしも、はべらじかし(こんな良い機会は他には無いでしょう)。また、はべりとも(また他にあったとしても)、*夜の間のほど知らぬ命の(明日をも知れぬ寿命なので)、頼むべきにもはべらぬを(待っても居られません)。さらば(それでは)、ただ、かかる古者、世にはべりけりとばかり(ただこのような老人が世の中に居たということだけでも)、知ろしめされはべらなむ(お知り頂きたいと存じます)。 *「よのまのほど」は<夜の時間の長さ>で、それを「知らぬ」というのは<夜明けを知らない=目覚めない=永眠する>ということだろうか。「夜の間のほど知らぬ命」は<明日をも知らない寿命>と渋谷訳文にある。従う。

三条の宮にはべりし*小侍従(三条の入道宮にお仕え申していた小侍従が)、はかなくなりにはべりにけると、ほの聞きはべりし(亡くなったと小耳に挟みました)。 *「小侍従」は注に<柏木と女三宮との密通を手引した女三宮の乳母子(「若菜下」巻)。>とある。今が薫中将君 22 歳の年だとすれば、小侍従が密通を手引きしたのは 23 年前の葵祭前夜だったことになる。薫君は、女三の宮 22 歳、衛門督藤君 33 歳(推)の時の子なので、入道宮は現在 44 歳、故藤君は存命なら 55 歳くらいの筈で、小侍従は入道宮の乳母子なので 40 歳代半ばあたりになりそうだが、亡くなったのは今年だろうか、去年だろうか、当時としても若死になるんじゃないのかな。故藤君の情婦ではあったようだし、入道宮との仲もこじれただろうから、結構辛い人生だったかも。何だかちょっと切ない気分になる。ただ、入道宮と疎遠になったとしても、小侍従は秘匿を旨に三条宮邸で飼い殺しにされた可能性は高いので、であれば上臆ではあるし、薫君も何らかの形で見知っていた者ではあるのかも知れない。この老女の言い方は、薫中将が小侍従を知っている事を前提にした話しっぷり、なのだと読んで置く。

*そのかみ(その昔、若い頃に)、睦まじう思うたまへし*同じほどの人(親しく思っておりました女房仲間が)、多く亡せはべりにける世の末に(多く亡くなってしまいましたこの晩年になって)、*はるかなる世界より伝はりまうで来て(遠い伝手を頼り来て)、この五、六年のほどなむ、これにかくさぶらひはべる(この五、六年ほどは、此方の宮様にお仕え申しております)。 *「そのかみ」は<その当時>を言う場合もあるようだが、「その」と指示される具体的な事柄は前以ては何も語られていないので、此処では一般的に<昔の若い頃>の事を言っている、と読んで置く。 *「同じほどの人」は、この老女とく同年輩の女房=女房仲間>のことではあるだろうが、此処に「小侍従」は含まれない、ように見える。小侍従はこの人よりは相当に若い筈だ。ただ、故人ではあるようなので、それが実に紛らわしい所で、「多く亡せはべりにける」には含まれるのかもしれないが、たとえそうだとしても、その主要な類例に当る人ではない、と私は思う。 *「はるかなる世界より伝はりまうで来て」は注に<遠い地方の国から縁故を頼って都に上ってきた、意。>とある。が、そんな風な言い回しで曖昧表現をしている、身の無い女房言葉なのだろう。下に「かの権大納言の御乳母にはべりしは、弁が母になむはべりし」とあって、この老女は故藤君の乳母子だったらしい事が示されており、この事はそれ自

体が非常に重要な発言なので当該項目で詳しくノートするが、此处ではともあれ、女なので藤殿に直接は親しくすることはなかっただろうが、かといって、そんな上臈の娘が田舎育ちや田舎暮らしの筈もない。また、本文に従ってこの人を<老女>と呼んで来たが、故藤君はこの時点で存命なら55歳くらいなので、この人もそれに近い年齢かと思われ、当時であれば50歳を過ぎれば<老人>だった、ということで能いのだろう。因みに、八宮の年齢もまだ不明だが、十宮の冷泉院が48歳なので、八宮も50歳代半ばあたりかと思われる。序でながら、もし故光君が存命なら70歳、朱雀院73歳の頃の話、ということで、朱雀院山の帝の生死は全く語られておらず不明だ。

*知ろしめさじかし(ご存じないかも知れませんが…)。このころ(今の)、藤大納言と申すなる(藤大納言という方の)御兄の(おおんこのかみの、兄君で)、右衛門督にて隠れたまひにしは(右衛門督の時に亡くなった御方は)、物のついでなどにや(何かの折に)、*かの御上とて(あなた様の御母上でいらっしゃる入道宮に係のある人の御事情として)、聞こしめし伝ふることも*はべらむ(伝え聞きなされたこともある、かもしれませぬ)。*「知ろしめさじかし」は「聞こしめし伝ふることもはべらむ」の前置句となる構文なので、会話での言い回しとしては此处に句点を置く息遣いだったとしても、文意は下文に通文する。語形は、動詞「知ろしめす」の未然形+打消しの助動詞「じ」の連体形+疑問(ないし婉曲表現)の係助詞「か」+強調の副助詞「し」。「知ろしめす」は、「知る」の未然形+尊敬の助動詞「す」の尊敬語「知らす」が使役語用との混乱を避けてか「知ろす」と音変化したもの、の連用形に尊敬の補助動詞「召す」が付いた重尊敬語。*「かのおおんうへ」とは何という歯が浮くような絶妙の曖昧表現であることか。「かの」は<あなた(中将)の>でもあり<故衛門督の>でもあり<入道宮の>でもあり、正にそのすべてが重なる<密通の>でもある。が、人の目も耳もあるこの場で、客観的に聞こえたのは前言の「三条の宮にはべりし小侍従はかなくなりはべりにける」を受けた文脈での<入道宮の>という言い方なのだろう。*「はべらむ」は「知ろしめさじかし」を構文上受けるので、下に「かし」を読むべき、かと思う。

過ぎたまひて(故衛門督はお亡くなりになって)、いくばくも隔たらぬ心地のみしはべる(そんな時間も経っていない気ばかりいたします)。その折の悲しさも、まだ袖の乾く折はべらず思うたまへらるるを(当時の悲しさもまだ袖が乾かないほどに思えますのに)、かくおとなしくならせたまひにける御齡のほども(中将殿がこのように大きくお成りになった年月の流れが)、夢のやうになむ(夢のように思われます)。

*かの権大納言の御乳母にはべりしは、*弁が母になむはべりし。*「かの権大納言」とは故衛門督藤君のことだ。時に中納言であった故藤君に於いての「大納言」権官任命は帝が病氣見舞いに賜った名誉職だったが、「大納言の御乳母」と言った時の「御乳母」に箔が付く響きは、その「御乳母」を母に持つこの人の自己尊大化を狙う発言意図が窺える気がする。即ち、この人は藤原家の長男付きの乳母子だったのであり、童女から上臈へと仕えた故藤君の側近女房だった、ということではないか。重大発言である。しかもその上に、故藤君の乳母と入道宮の乳母は実の姉妹であることが若菜下巻で語られていた。若菜下巻七章一段には、「なほ(今もなお藤原君は)、かの下の心忘れず(もともと女三の宮への恋心が忘れられずに)、小侍従といふ語らひ人は(小侍従という相談相手の取次女房は)、宮の御侍従の乳母の娘なりけり(三の宮の御侍従という乳母の娘なのであり)、その乳母の姉ぞ(その乳母の姉というのが)、かの督の君の御乳母なりければ(藤原君の乳母だったので)、早くより気近く聞きたてまつりて(昔から直接見知った人の話として宮の御様子をお聞き申し上げて)、まだ宮幼くおはしましし時より(まだ宮が幼くいらした時から)、いとよらになむおはします(とても美しくいらっしゃいますとか)、帝のかしづきたてまつりたまふさまなど(朱雀院の帝が大事に育て申しなさることなどを)、聞きおきたてまつりて(聞き置き申し上げて)、かかる思ひもつきそめたるなりけり(そうした恋心も付き始めたのでした)。」、といった妙に丁寧な説明文が

あって印象に残っているが、であれば、この弁の君と小侍従は従姉妹なのであり、小侍従ばかりかこの弁君も故藤君の召し人だったかもしれず、であれば、「過ぎたまひて、いくばくも隔たらぬ心地のみしはべる」も俄然生々しく響く。そして小侍従の死についても、この人が言った「はかなくなりはべりにけると、ほの聞きはべりし」の「ほの聞きはべりし」も、決して<僅かに伝え聞き知った>のではなく<事情を熟知している>ことを婉曲に言う女房言葉だったと知れる。割れた卵から黄味が出たような、濃い展開だ。*「弁(べん)」は発言者本人の自己表現らしい。此処に初めてこの老女の通り名が<弁の君>であると知れる重要箇所だ。注には<身分が下の者は上の人に向かって自分の名をいう。>とある。それはそれで参考になる注釈説明だが、何とも素っ気無い。

朝夕に仕うまつり馴れはべりしに(それで私も側近女房として、朝夕に衛門督の君にお仕え申していましたが)、*人数にもはべらぬ身なれど(私など取るに足らない分際ながら)、*人に知らせず(督の君は他の者には知らせず私だけに)、御心よりはた余りけることを(思い余りなされた心情を)、折々うちかすめのたまひしを(その都度少しお漏らしなさいましたが)、今は限りになりたまひにし御病の末つ方に(いよいよ最期とお成りの御臨終間際に)、召し寄せて(私をお側に呼び寄せなされて)、いささかのたまひ置くことなむはべりしを(少し御遺言なされた事がございまして)、*「人数にもはべらぬ身なれど」は注に<自分自身をいう。柏木の乳母子として仕えたことをいう。>とある。どうしてこんな重要な注釈解説を、こんな項目で、こんなに素っ気無く示すのか。私は当初は、この人の母の「かの権大納言の御乳母」が主語かと思ったが、また母親のことを貴人相手に話すのだから敬語が無いのかとも思ったが、下文まで読むと、発言者本人が主語でなければ変な内容になっていて、これが「自分自身をいう」ものと確認できた。それにしても、この人が故藤君の側近女房だった、ということの重要性は、こんな素っ気無い扱いで済むものなのか。何だかとても不思議だ。*「人に知らせず〜うちかすめのたまひし」はこの人が故藤君の召し人だったことを強く示唆している、のだろう。

聞こしめすべきゆゑなむ、一事はべれど(その中にあなた様にお知らせ申すべき事柄の一つがございしますが)、かばかり聞こえ出ではべるに(このように申し上げまして)、残りをともしめす御心はべらば(お聞きになりたいお気持ちをお持ちでいらっしゃるなら)、のどかになむ、聞こしめし果てはべるべき(また後日ゆっくりと残さずお話し申し上げる所存でございします)。*若き人びとも、かたはらいたく(ただ此処では、若い人たちの傍目もあり、こんな老女があなたのような色男を独り占めしては)、さし過ぎたりと(無駄話が過ぎると)、つきじろひはべるも(不平を言い出すのも)、ことわりになむ(無理がありませんので)」*「若き人びとも」以下は、若女房が中將を誉めそやして賑やかにしている事を方便にして、話の打ち切りを切り出しているが、当然、これ以上の話は余人には聞かせられない秘事である。中將が自分の出生に疑念があつて、真相を知りたいなら教えるが、疑念がないなら、蹴鞠事件あたりを良い思い出の面白い話題として話して終える、くらいの弁の腹心算だったのだろう。本文では「かたはらいたし」の一言で済ませているが、言い換えではこのくらい補語しないと弁の意図が示せない。

とて(とって老女は)、さすがにうち出でずなりぬ(そのまま話を打ち切りました)。

あやしく、夢語り(不思議な夢物語で)、*巫女やうのもの、問はず語りすらむやうに(神の使者みたいなものと問わず語りをしたように)、めづらかに思さるれど(思い掛けなく思われなされたものの)、あはれにおぼつかなく思しわたることの筋を聞こゆれば(本当に知りたいと思いつけていらっしゃった出生の疑念に付いての話に思えて)、いと奥ゆかしけれど(非常に興味があつたが)、げに、人目もしげし(実際に余人も多く居て)、*さしぐみに古物語にかかづらひて(成り行

きで昔話に聞き入って)、夜を明かし果てむも(夜を明かすというのもの)、*こちごちしかるべければ(寒々しくて厭なので)、*「巫女」は「かむなぎ」と読みがある。「かむなぎ・かななぎ」は<《「神和(かな)なぎ」の意。「かむなぎ」とも表記》神に仕えて、神楽を奏して神意を慰め、また、神降ろしなどをする人。男を「おかななぎ(覲)」、女を「めかななぎ(巫)」という。令制では神祇官の所管に五人が置かれ、古代社会の司祭者の遺風を存した。こうなぎ。みこ。いちこ。>と大辞泉にある。*「さしぐみに」は<だしぬけに、不用意に>と大辞泉にある。物事の途中の興味本位に、みたいな語感。*「こちごちし」は「骨骨し」と表記されて<無骨だ。無風流だ。洗練されていない。>と大辞林にある。

「そこはかと思ひ分くことは(それが何のことかと思ひ当たることは)、なきものから(無いものの)、いにしへのことと聞きはべるも(昔話をお聞き申すのは)、ものあはれになむ(興味があります)。さらば(では後日に)、かならずこの残り聞かせたまへ(必ず残りの話をお聞かせ下さい)。霧晴れゆかば(霧が晴れると)、はしたなかるべきやつれを(見苦しいやつれ姿を)、面なく御覧じとがめられぬべきさまなれば(面目なく見咎められ申し上げる状態なので)、思うたまふる心のほどよりは(もっと居たいと思います気持ちに反して)、口惜しうなむ(残念ながら失礼致します)」

とて(とって中將が)、立ちたまふに(座をお立ちになると)、かのおはします寺の鐘の声、かすかに聞こえて(宮様が修行していらっしゃる寺の鐘の音がかすかに聞こえて)、霧いと深くたちわたれり(霧がとても深く立ち込めます)。

[第七段 薫、大君と和歌を詠み交して帰京]

峰の八重雲、思ひやる隔て多く、あはれなるに(峰の八重雲に都から遠く離れたこの宇治の寂しさが悲しく感じられるので)、なほ、この姫君たちの御心のうちども心苦しう(やはりこの姫君たちの御心中がいたわしく)、*「*何ごとを思し残すらむ(都暮らしにいろいろと思ひ残しがおありなんだろう)。かく(此処では)、いと奥まりたまへるも(ひどく引っ込み思案でいらっしゃるのも)、ことわりぞかし(無理はない)」などおぼゆ(などと中將には思われます)。*「何ごと」は<何か>ではなく<いろいろの事柄>なのだろう。それも<都暮らし>について、なのだろう。「かく、いと奥まりたまへる」は<このように実に引っ込み思案でいらっしゃる>という直接の感想であると共に、姫君たちの日頃の生活ぶりを<このような田舎暮らしでは表に出ずに、たいそう引き込んでいらっしゃる>と思ひ遣ったのが「思ひやる隔て多く」という言い方に示されている、かと思う。

「あさばらけ家路も見えず、尋ね来し槇の尾山は霧こめてけり (和歌 45-08)

「家路見分けぬあさばらけ、槇の尾山は霧深し (意訳 45-08)

*注に<薫から大君への贈歌。帰る気持ちがしない、という挨拶の歌。「槇の尾山」は宇治川右岸にある山、歌枕。>とある。「まきのをやま」に何か掛詞があるのだろうか。少しウェブ検索した限りでは分からず、幻想的な旅情しか見えて来ない。で、それだけでは言い換えようもない。

心細くもはべるかな」

と(と言って)、立ち返りやすらひたまへるさまを(引き返して帰りあぐねていらっしやる中将を)、都の人の目馴れたるだに、なほ、いとことに思ひきこえたるを(都の目馴れた人でさえ、やはり格別に優れた姿と思ひ申すのに)、まいて(ましてこの山荘の人々には)、いかがはめづらしう見きこえざらむ(どんなに素晴らしく見え申したことだろうか)。

御返り聞こえ伝へにくげに思ひたれば(姫の御返歌を若女房たちが取り次ぎ申し難そうに恥らっている)、例の(昨夜のように姫君御自身が)、いとつつましげにて(ごく小声で)、

「雲のある 峰のかけ路を 秋霧の いとど隔つる ころにもあるかな」(和歌 45-09)

「雲の架け橋隔つのは、秋秋するほど厭な霧」(意識 45-09)

*注にく大君の返歌。「家路」を「かけ路」と変え、「霧」の語句はそのまま、「隔つ」を父宮と薫の間の意として返す。『集成』は「峰の八重雲思ひやる隔て多くあはれなるに」とあった薫の思いと、期せずして同じ心を詠む」と注す。>とある。「かけち」は「懸け路」と表記され<がけに木材で棚のように造った道。かけみち。かけはし。>または<険しい道。>と大辞林にある。「雲の架け橋」と言えば<崇高な理想>や<叶わぬ夢>のことらしい。「あきざり」の「あき」は「飽き(厭だ)」。

すこしうち嘆いたまへるけしき(すこし嘆息していらっしやるらしい姫の様子は)、浅からずあはれなり(風情があって印象深い)。

何ばかりをかきふしは見えぬあたりなれど(特に面白味もない山荘の景色だが)、げに(正にこの姫君の心根ゆえに)、心苦しきこと多かるにも(立ち去り難い気持が多かったが)、明うなりゆけば(次第に夜が明けてくると)、さすがにひた面なる心地して(さすがに全く素顔を曝すようで気恥ずかしく)、

「なかなかなるほどに(話の途中で)、承りさしつること多かる残りは(聞き差し申してしまった多くの残りは)、今すこし面馴れてこそは(もう少し慣れ親しんでから)、*恨みきこえさすべかめれ(是非ともお聞かせ頂きたいものです)。 *「うらむ」は<恨みを晴らす、不満を解消する>という語用もあるようで、此处では<残りの話を聞くことを切望する>みたいな言い方なのだろう。

さるは(しかし親しくないからといって)、かく世の人めいて、もてなしたまふべくは(このようにまるで他人行儀に私を持て成しなさるといのは)、思はずに(もう何度も此方に参上申している私としては、心外で)、もの思し分かざりけりと(私を誤解なさっていると)、恨めしうなむ(残念に思います)」

とて(と言って中将は)、宿直人がしつらひたる西面におはして(宿直の侍が用意した西面の控室にいらっしやって)、眺めたまふ(休憩なさいます)。

「網代は、人騒がしげなり(網代漁は人が出て騒がしい)。されど、氷魚も寄らぬにやあらむ(しかし氷魚は掛かっているらしい)。すさまじげなるけしきなり(漁師たちは、思わしくなさそうな表情をしている)」

と、御供の人びと見知りて言ふ(と御供の人びとが宇治川の様子を見知っていて言います)。

「あやしき舟どもに(粗末な舟の何艘かに)、柴刈り積み、おのおの何となき世の営みどもに、行き交ふさまどもの(柴を刈り積んで各自地道な運搬作業で行き交う者たちが)、はかなき水の上に浮かびたる(頼りない水の上に浮かんでいる暮らしぶり)、誰れも思へば同じことなる、世の常なさなり(考えてみれば誰しも同じ無常の世界だ)。

われは浮かばず(自分一人は浮き沈みもなく)、玉の台に静けき身と(立派な御殿に落ち着いて暮らす身分だと)、思ふべき世かは(思える世だろうか)」と思ひ続けらる(と思ひ続けずにはいられません)。

硯召して(中將は硯を出させて)、あなたに聞こえたまふ(奥の姫に贈歌なさいませ)。

「橋姫の心を汲みて高瀬さす、棹のしづくに袖ぞ濡れぬる (和歌 45-10)

「橋が無くても私なら、袖を濡らして舟を漕ぐ (意識 45-10)

*注に<薫から大君への贈歌。『河海抄』は「さむしろに衣かたしきこよひもや我を待つらむ宇治の橋姫」(古今集恋四、六八九、読人しらず)を指摘。>とある。「さむしろ(狭蓆)」は<小さな敷物>。「かたしく(片敷く)」は<古く男女が互いに袖を敷き交わして寝たことから)衣の片袖を敷いて一人寂しく寝る。ひとり寝をする。>と古語辞典にある。「ころもかたしき」で<寂しく独り寝する>という意味になるので、「さむしろに」が如何にも意味ありげだ。が、「宇治の橋姫」が何を指すのかは定説が無いらしく、実は意味不明の歌だ。ただ、「宇治橋」には守り神として女神が祭られていたことは確からしく、また、どの写真を見ても宇治橋あたりの宇治川の流は早い。橋が壊れていて川向こうの女のところに通えない、みたいな遊び歌だったら楽しい。さて、其処で当歌の「高瀬さす」だが、「高瀬」は<浅瀬>で宇治橋あたりは浅瀬で流れが速いということであり、そういう所では底の平らな高瀬舟で往来することになるので、中將は宇治川を行き交う舟を見て、橋が壊れていても自分なら「姫の心を汲みて高瀬さす棹のしづくに袖ぞ濡れぬる」と洒落込んだ、のだろう。

眺めたまふらむかし(それであなたも私の気持ちがお分かりになるだろう)」

とて(と書いて)、宿直人に持たせたまへり(侍に姫の許へ待たせなさいませ)。いと寒げに(侍は川風が吹き抜ける渡り廊下を通して、とても寒そうに)、いららぎたる顔して(こわばらせた顔をして中將の贈歌を姫の御居間に持って参ります)。御返り、紙の香など、おぼろけならむ恥づかしげなるを(御返歌は紙の香などが在り来たりの物で薫中將に対しては気が引けたのだが)、疾きをこそかかる折には、とて(即答こそがこういう歌詠みには肝心だろうと言うことで)、

「さしかへる宇治の河長朝夕の、しづくや袖を朽たし果つらむ (和歌 45-11)

「何の此処等の船頭は、朝夕袖を濡らします (意識 45-11)

*注に<大君の返歌。「雫」「袖」の語句はそのまま用い、「橋姫」は「宇治」、「さす棹」は「さしかへる」と変え、「袖は濡れぬる」を舟長の棹の雫で「袖を朽たしはつらむ」と切り返した。>とある。「かはをさ」は<船頭>

だが、此処では宇治川のほとりで暮らす<姫自身>を例えて、旅人でない宇治の住人は「朝夕のしづくや袖を朽たし果つらむ(毎日泣き暮らす)」と「さしかへ」して応えた。

身さへ浮きて(浮草稼業で)」

と、いとをかしげに書きたまへり(とそれは風流にお書きなさいました)。「まほにめやすくもものしたまひけり(実に気が利いていらっしゃる)」と、心とまりぬれど(と中将は心惹かれたが)、

「御車率て参りぬ(御車を引いて参りました)」

と、人びと騒がしきこゆれば(と従者が帰参を促し申したので)、宿直人ばかりを召し寄せて(侍ひとりと呼び寄せなさって)、

「帰りわたらせたまはむほどに(宮様がお帰りになった頃に)、かならず参るべし(必ず伺います)」

などのたまふ(と仰います)。濡れたる御衣どもは、皆この人に脱ぎかけたまひて(濡れた狩衣装束は皆この侍に下げ渡して)、取りに遣はしつる御直衣にたてまつりかへつ(取りに遣らせた略礼装に着替えなさって、帰途に着きなさいました)。

[第八段 薫、宇治へ手紙を書く]

古い人の物語、心にかかりて思し出でらる(中将は老女の話が気になって思い出されます)。思ひしよりは(また意外にも)、こよなくまさりて(姫君たちが非常に優れていて)、をかしかりつる御けはひども、面影に添ひて(風情のあった庭先の光景に面影が加わって)、「なほ、思ひ離れがたき世なりけり(やはり出家は難しそうだ)」と、心弱く思ひ知る(と気弱に浮世の情け深さを思い知らされます)。

御文たてまつりたまふ(中将は宇治へ御手紙を差し上げなさいます)。懸想だちてもあらず(恋文のような風流めいたものではなく)、*白き色紙の厚肥えたるに(白い上質の懐紙の分厚いものに)、筆*ひきつくろひ選りて(筆を事改めて選び)、墨つき見所ありて書きたまふ(筆遣いも見事にお書きになります)。*「白き色紙」は変な言い方に見えるが、「色紙」は「しきし」と読みがあるものの、大辞泉には「いろがみ」の項目で<鳥の子紙を5色に染め分けた畳紙(たとうがみ)。>との説明があり、「鳥の子紙(とりのこがみ)」は<雁皮(がんび)を主原料とした上質の和紙。鶏卵の色に似た淡黄色で、強く耐久性があり、墨の映りもよい。福井県・兵庫県産のものが有名で、越前鳥の子・播磨紙(はりまがみ)ともいわれる。>とあるので、是は<白い上質の懐紙>のことと読んで置く。*「引き繕ふ」は<体裁を整える。あらたまった態度をとる。気取る。>と大辞泉にある。

「うちつけなるさまにやと(出し抜けに話が進んでも興味が無いだろうと)、あいなくとどめはべりて(敢えて途中で打ち切りまして)、残り多かるも苦しきわざになむ(話し足りずに帰ったのも苦しいことでした)。片端聞こえおきつるやうに(少しお話させて頂きましたように)、今よりは、御簾の前も(今後はよりお側近くに)、心やすく思し許すべくなむ(親しくさせて頂きたく存

じます)。御山籠もり果てはべらむ日数も承りおきて(宮様の山籠りが終わる日程も承りまして)、いぶせかりし霧の迷ひも、はるけはべらむ(お目に掛かれなかった先日の霧の紛れも晴らすべく再訪致したいと存じます)」

などぞ(などと中将は)、いとすくよかに書きたまへる(いやに真面目ぶってお書きになります)。*左近将監なる人(さこんのぞうなるひと)、御使にて(おおんつかひにて)、 *「左近将監」は和名だとくひだりのちかきまもりのつかさのじょう>になるらしいが、「将監」は音読みなら「しょうげん」で訓読みが「じょう、ぞう」とのこと。で、「じょう」とは<四等官制に於いての三等官>という官称であり、近衛府では「将監」だが、兵衛府と衛門府では「尉」、太政官では「少納言」、省では「丞」などと書き表すとの事。で、この職掌名の音読みと訓読みの区別は時と場合に応じて慣例上決まっているらしいが、とても私には覚束無い。因みに、近衛府なら「長官(かみ・一等官)」は「大将」であり、「次官(すけ・二等官)」は「中将」と「少将」、「判官(じょう・三等官)」は「将監」で、「主典(佐官・さくわん・四等官)」は「将曹」とのことだが、今さらは単に煩わしい。ただ、以前にも見たが、次官までは作戦立案の総合管理職であり、判官以下が現場指揮官ではあるらしく、その身分差は厳然としていたようだ。特に近衛府に於いては、次官以上は上流貴族で固められた雲上人だったらしい。つまりは、中将の薫君が遣いに使う事が出来た最上位の武官が「左近将監」のようだ。この「将監」はまた当然にも、部下を従え、従者を連れて、それなりの格式を以て宇治の山荘を訪れる、という仕掛け。中将の威厳演出だ。

「かの老人訪ねて、文も取らせよ(あの老女を訪ねて、この文を渡せ)」

とのたまふ(と仰います)。宿直人が寒げにてさまよひしなど(山荘の侍が寒そうに右往左往していたのを)、あはれに思しやりて(中将は哀れに思い遣って)、大きな椀破籠やうのもの(大きな弁当箱みたいな箱詰め料理を)、あまたせさせたまふ(たくさん手土産に持たせなさいます)。

またの日(その次の日には)、*かの御寺にもたてまつりたまふ(宮様が修行なさっている御寺にも中将は阿闍梨と懇意なので、御見舞を差し上げなさいます)。 *「かの御寺にもたてまつりたまふ」は中将が主語らしいが、この寺への見舞いを、八宮が修行で世話になっているから、という理由で中将が施すのでは、王家に対してあまりにも僭越で、中将自身が阿闍梨と懇意だから、と読む他はない。となると、下文にある「さておはしますほどの布施」の主語は八宮だろうから、「絹、綿など多かりけり」は八宮邸の方に中将が気を利かせて、八宮の負担分を補充すべく贈った、と読むべきかと思うが、非常に分かり難い書き方で辟易する。八宮と中将に下話が出来ていて、八宮の名前で布施分を中将が山寺の八宮宛に贈った、みたいなことも有り得るのかも知れないが、取り敢えず、中将は八宮邸に物資を送った、と読んで置く。そう読めば、その下の「御行ひ果てて、出でたまふ朝なりければ」の文が八宮が主語の文として意味が通り易い。

「山籠もりの僧ども、このころの嵐には、いと心細く苦しからむを(山籠りの僧たちはこの季節の嵐にはとても心細く辛い暮らしなので)、さておはしますほどの布施、賜ふべからむ(宮がその御世話を受けていらっしゃる事への御礼の布施をなさることだろう)」と思しやりて、絹、綿など多かりけり(と中将は御配慮なさって、その分の絹織布や真綿などを多く、八宮邸の方にお贈りなさいます)。

御行ひ果てて(定期勤行を終えて)、出でたまふ朝なりければ(山からお帰りなさる朝になると八宮は)、行ひ人どもに(修行僧たちには)、綿、絹、袈裟、衣など(綿入れや布や袈裟や法衣など

を)、すべて一領のほどづつ(またそれらの一揃いづつを)、ある限りの大徳たちに賜ふ(寺の全ての高僧たちに賜わりなさいます)。

宿直人が、御脱ぎ捨ての、艶にいみじき狩の御衣ども、えならぬ白き綾の御衣の、なよなよといひ知らず匂へるを、移し着て(山荘の侍は中将が脱ぎ捨てた趣向ある上質な狩衣の何とも言えない良い風合いの白い綾織の着物が柔らかく言いようもない芳香を放っているのを譲り着て)、身をはた、え変へぬものなれば(本人は変わらず無骨なままなので)、似つかはしからぬ袖の香を(似合いもしない袖の香を)、人ごとにとがめられ、めでらるるなむ(会う人毎に冷やかされては褒められて)、なかなか所狭かりける(何とも身の置き所がないのです)。

心にまかせて(本性のままに)、身をやすくも振る舞はれず(だらしのない態度もし難く)、いとむくつけきまで、人のおどろく匂ひを、失ひてばやと思へど(呆れるほど人に気付かれる服の匂いを消したいと思うが)、所狭き人の御移り香にて、えもすすぎ捨てぬぞ(敬うべき高貴な人の移り香なので洗い流すことも出来ないというのは)、あまりなるや(侍には酷でしょうか)。

[第九段 薫、匂宮に宇治の姉妹を語る]

*君は(中将の薫君は)、*姫君の御返りこと(姫君からの御返書が)、いとめやすく子めかしきを、をかしく見たまふ(とても無難でおっとりしているのを興味深く御覧になります)。 *「きみ」は薫中将君らしいが、主語省略文に馴れて来た所為か、このように偶に主語明示文があると妙に緊張する。それに、これまでの多くは「中将の君」のように客観性のある言い方で、この人物と特定し易かったが、このように急に「君」だけであると、是は一体誰のことかと間諛付く。で、文意から逆推して是が薫君らしいと知れるわけだが、何とも語り手との感性の違いに苛立ちを禁じ得ない。 *「姫君の御返りこと」に付いては具体記述が全く無い。だから、「目安し」も「子めかし」も何を如何言っているのか皆目分らない。「目安し」はく見た目に感じがよい。見苦しくない。また、無難だ。>と大辞林にある。「子めかし」はく子供っぽい。あどけない。おっとりしている。>とある。文面にしても筆跡にしても、「目安し」と「子めかし」が両立する無難な言い方はく無難でおっとりしている>くらいだろうか。しかし、手紙の内容が分からないので、如何言ってみても手応えは無い。

宮にも(宮に於かれても)、「かく御消息ありき(このように中将殿からのお手紙がございました)」など、人びと聞こえさせ(などと女房たちが申し上げて)、御覧ぜさすれば(実際にお見せ申せば)、

「何かは(別に構わないだろう)。懸想だちてもてないたまはむも(中将君を懸想だった人として持て成しなざるのも)、なかなかうたてあらむ(却って変だろう)。例の若人に似ぬ御心ばへなめるを(彼は普通の若い男とは違う御性質のようだから)、亡からむ後もなど(私の亡き後もと)、一言うちほのめかしてしかば(一言ほのめかして置いたので)、さやうにて(その心算で)、心ぞとめたらむ(姫たちを気に懸けていらっしゃるのだろう)」

などのたまうけり(などと仰るのです)。

御みづからも(宮ご自身からも)、さまさまの御とぶらひの(様々な御見舞品が)、山の岩屋にあまりしことなどのたまへるに(山寺の修行講堂に溢れていた事などを感謝なさるお手紙があった

ので)、*参うでむと思して(中将は宇治の山荘に参上申し上げようとお思いになったが)、 *「まうでむとおぼして」は注に<主語は薫。>とある。確かに主語も分かり難いが、この文での分かり難さは「思して」の接続助詞「て」の語用にもある。「て」は古語辞典に<完了の助動詞「つ」の連用形から出来たもの>と説明されているが、実際に多くの場合は、順序立てて事物の進行を説明する時に、一動作や一事態の言及を終えて、次のまたは続く話題に説明を移す意図で使われる文節記号のようだが、この文節を示すという汎用性の高さが、多くの文意を構成させるようで、此处では逆接ではなく保留意での<だが(その時に)>という文意になるようで、本来なら「思したるに」などと言うべき箇所のように思われる。更に言えば、下文の内容が是までの話とは違う趣きの事柄なので、何故この文と接続助詞「て」で繋げて一文としたのか、その意図が分からない。取って付けた様な話だから、同じ文脈の中に紛れ込ませようとしたのだろうか。しかし、物語に話の飛躍は付き物で、それを如何演出するかが見せ場の一つでもあるだろうに、こういう語り方をしたのは、あえて取って付けた様な印象を与えようとしているかのようだ。だから、その意図は全く分からない。

「*三の宮の(匂宮が)、かやうに奥まりたらむあたりの(この山荘の姫君のように人目から隠れ住んでいる人が)、見まさりせむこそ、をかしかるべけれと(会ってみると優れているというのは興味深いと)、*あらましごと(にだにのたまふものを(話に聞く絵空事につけても仰るので)、聞こえはげまして(この姫君の事を知らせそそのかして)、御心騒がしたてまつらむ(気を揉ませ差し上げてみよう)」と思して(とお考えになって)、のどやかなる夕暮に*参りたまへり(閑な日の夕方に二条院の匂宮の御座所に参上なさいました)。 *「三の宮」は注に<以下「御心騒がしたてまつらむ」まで、薫の心中。匂宮をさす。格助詞「の」は主格、「のたまふものを」が述語。>とある。中将が日頃から匂宮を「三の宮」と認識していた、というのは至極当然のことかもしれないが、それすらも重要な情報に思えてくるほど、この辺りの文は主語が分かり難い。なお、言い換え文では遠慮なく<匂宮>にして置く。 *「あらましごと」は<粗筋話→絵空事>だろうか、昔話に良くある設定だということは以前にも語られていた気がする。 *「参りたまへり」に付いては、匂兵部卿巻一章一段に「紫の上の御心寄せことに育みきこえたまひしゆゑ三の宮は二条の院におはします」とあったので、薫中将は冷泉院の自室から二条院の匂宮の部屋を訪ねた、ということなのだろう。

例の、さまざまなる御物語、聞こえ交はしたまふついでに(薫中将はいつものように匂宮とさまざまな世間話をなされたついでに)、宇治の宮の御こと語り出でて、見し暁のありさまなど、詳しく聞こえたまふに(宇治の宮邸を訪れた際の話を持ち出して、目にした早朝の光景の風情などを詳しく話し聞かせなされると)、宮、いと切にをかしと思いたり(匂宮は頻りに身を乗り出して興味をお持ちになりました)。

さればよと、御けしきを見て(思った通りだと薫君は匂宮の御反応を見て)、いとど御心動きぬべく言ひ続けたまふ(ますます興味をそそるように話し続けなさいます)。

「さて、そのありけむ返りことは(それで、そのあったという姫の返書は)、などか見せたまはざりし(何故お見せ下さらないのですか)。*まろならましかば(私だったら)」と恨みたまふ(と匂宮は不平を仰います)。 *「まろならましかば」は注に<下に「見せまし」などの語句が省略。主語は「まろ」匂宮。自分なら薫に見せるだろうに、の意。>とある。

「*さかし(いやだから、それですよ)。いとさまざま御覧ずべかめる端をだに、見せさせたまはぬ(あなたはさぞいろいろな女からの御手紙を御覧になっていそうな、その一部でさえ私にお

見せになりませんが、)。 *「さかし」は<念押し>や<同意語>と古語辞典に説明されている。此処でも一応は同意でもあるようだが、「いとさまさま〜見せさせたまはぬ」の挿入句が皮肉になっていて、結局は姫の手紙は見せ難いみたいな言い方で気を持たせるという、半同意というか見せ掛けの同意語だ。

かのわたりは(その姫君は)、かくいとも埋れたる身に(私のような極く地味な者が)、ひき籠めてやむべきけはひにもはべらねば(引き隠して置いて良い人とも思われませんので)、かならず御覧ぜさせばや、と思ひたまふれど(必ず御覧に入りたいと存じますが)、*いかでか尋ね寄せたまふべき(あなたがどうして気軽に宇治の宮邸にお寄り申しなされましようか)。 *「いかでか〜」は注に<反語表現。『完訳』は「実際には高貴な匂宮の宇治行きは困難だとして、逆に彼の関心をあおり続ける」と注す。>とある。従って補語する。

*かやすきほどこそ(ごく軽々しい身分の者であれば)、好かまほしくは、いとよく好きぬべき世にはべりけれ(好きなように女遊びが出来るというのが世の中です)。うち隠ろへつつ多かめるかな(人目を忍ぶのも簡単ですからね)。 *「かやすし」は<容易い。軽々しい。>で、「か」は強調の接頭語と古語辞典にある。

さるかたに見所ありぬべき女の(其相応に魅力があつてしかるべき良家の女が)、もの思はしき、うち忍びたる住み処ども(不遇な身で隠れ住んでいる家などというものは)、山里めいたる隈などに、おのづからはべかめり(人里離れた山際などに、どうしても有り勝ちのようです)。

この聞こえさするわたりは(今お話し申した姫君たちは)、いと世づかぬ聖さまにて(きっと父宮に習って、さぞ世離れした仙人風で)、こちごちしうぞあらむ(無風流なのだろうと思ひ込み)、年ごろ、思ひあなづりはべりて(この数年来まるで気に掛かりませんで)、耳をだにこそ、とどめはべらざりけれ(噂話さえ聞こうとして来ませんでした)。

ほのかなりし月影の見劣りせずは(ほのかな月光で見誤ったのでなければ)、*まほならむはや(美人に違いありません)。けはひありさま(たたずまいや物腰は)、はた、さばかりならむをぞ(またああしたものを)、*あらまほしきほどとは(理想的だと)、おぼえはべるべき(言うべきなんでしょうね) *「まほ」は<十分整っている容姿=美人>。 *「あらまほしきほどとはおぼえはべるべき」は気を持たせる常套句。

など聞こえたまふ(などと薫君は申しなさいます)。

果て果ては(遂に匂宮は)、まめだちていとねたく(本気になって薫君が妬ましく)、「おぼろけの人に心移るまじき人の(普通の女に執着しないこの人が)、かく深く思へるを、おろかならじ(こうまで深く思うのだから余程好い女なのだろう)」と、ゆかしう思すこと(と非常に興味をお持ちになること)、限りなくなりたまひぬ(この上なくお成りでした)。

「なほ、またまた、よくけしき見たまへ(さらに今後も詳しく様子を聞かせてくれ)」

と、人を勧めたまひて(と匂宮は薫君に山荘通いを促しなさって)、限りある御身のほどのよだけさを(自由の利かない御自身の身分の高さを)、厭はしきまで、心もとなしと思したれば(面倒だと不満にお思いになるので)、をかしくて(薫君は面白がって)、

「いでや、*よしなくぞはべる(いや、是は愚にも付かない御話を申しました)。しばし、世の中に心とどめじと思うたまふるやうある身にて(少しも現世に執着しないようにとの考えがある立場で)、なほざりごともつつましようはべるを(気分任せの色恋沙汰も自制すべきなのですが)、心ながら*かなはぬ心つきそめなば(我ながら自制の利かない恋心が起きてしまったら)、おほきに思ひに違ふべきことなむ、はべるべき(全く本意に背くことになってしまう、次第ですから)」*「よしなし」はざっと<不都合だ>。此処では冗句語用で、以下「はべる」というワザとらしい言い回しが続く。 *「かなはぬ心」は「つつましようはべる」に<反する気持>と読んで置く。ただ、こういう<ダメだからダメだ>みたいな論理性の薄い話は、言い回しの面白さこそが生命線なので、実は言い換えが利かないような文だが、言い換えないと面白味も分からない、という厄介なものだ。

と聞こえたまへば(と申しなさると)、

「いで、あな、こととし(いや何と大仰な)。例の、おどろおどろしき聖言葉(いつもの君の高邁な仙人言葉の)、見果ててしがな(真偽のほどを見極めたいもんだ)」

とて笑ひたまふ(と言って匂宮は笑いなさいます)。

*心のうちには(薫君は内心で)、かの古人のほのめかしし筋などの(あの老女が仄めかした出生の秘密に関わりそうな話に)、いとどうちおどろかれて(非常に動揺して)、ものあはれなるに(深刻な気分なので)、*をかしと見ることも(姫君たちを情人と見ることも)、めやすしと聞くあたりも(良い評判を聞いても)、*何ばかり心にもとまらざりけり(自分の相手としては少しも考えられないのでした)。 *「心のうちには」は注に<薫の心中をさす。>とある。こういう主語省略は本当に読みづらい。 *「をかしと見ることも、めやすしと聞くあたりも」は注に<宇治の八宮姉妹のこと。>とある。難文だ。 *「何ばかり心にもとまらざりけり」は注に<『完訳』は「前には姫君への関心が示された、ここでは出生の秘事への関心がより強い」と注す。>とある。しかし、薫君は姫君と和歌の贈答をしている。それもなかなか風情のあるものだった。で、何というか、この文はまるで物語構成上の設定メモのような印象だ。単に自分の覚書なのか、それとも、この線で上手く話を組み立てるように、と誰かに指示したのだろうか。で、その演出が間に合わずに粗筋だけが出てしまった、とか。